# 南京国際平和通信

## 第 64 号（2025 年 2 月）


お別れ

## 南京大虐殺の生存者易蘭英さんと陶承義さんが逝去

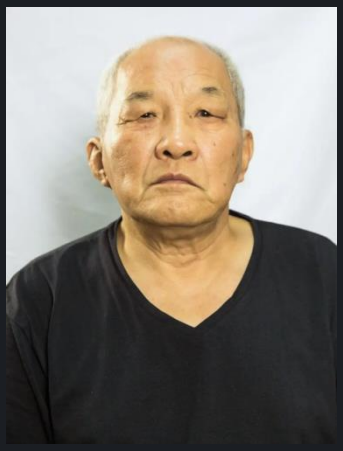
南京大虐殺の生存者易蘭英さんと陶承義さんが、2 月 15 日に逝去されました。

1926 年 5 月 4 日に生まれた易さんは、1937 年の日本軍による南京侵攻後、家族とともに五台山付近の五条巷難民区に避難した。「生計を立てるため、私は五条巷の仮住宅の前に露天商売を家族から頼まれて、タバコやマッチ、ピーナッツを売っていた。ある朝、銃を携えた日本兵の小隊が現れ、馬に乗った将校が私に近づいたが、何を言っているのか分からず、私はその場でボッとしていた。すると将校が私を複数回にわたり平手打ちを加え、私の一本の歯を打ち落とされ、口元に血が流して、耳鳴りがして一時的に聞こえなくなった。その後、将校がタバコを取り出して私に見せ、私がすぐマッチを渡したから更なる暴力を免れた」と彼女が生前に証言した。この体験は幼い易さんの心身ともに極度の恐怖を与え、生涯にわたり彼女はずっと動悸と

耳鳴りに苦しまれた。

2022 年に記念館スタッフが易蘭英さんの誕生日を祝った

陶さんは 1936 年 5 月 24 日に生まれた。1937 年、日本軍が南京を占領した後、彼の父・陶仕棟さん、そして七番目の伯父・江金栄さん、六番目の従兄・江家志さんとともに日本軍に連行され、漢中門の外側で虐殺された。一家の経済的基盤を失った陶家は、母親が子供たちを連れて行商で生計を立てざるを得なかった。



陶承義さん

2 月 21 日、彫刻家の呉顕林さんが 82 歳で亡くなった。彼は記念館の「古城の災難」大型組み合わせ彫刻、「歴史の証人の足跡」銅板路、生存者「倪翠萍」「彭玉珍」銅像、「紫金草少女」銅像、さらに記念館の分館である南京利済巷慰安所陳列館「慰安婦」テーマ銅像の創作者である。呉さんは生前「彫刻は歴史の記録者であると同時に、未来への警鐘でもある」と語った。

## 国際ボランティアが南京の思い出を語る

3 月 5 日、国際ボランティアたちが記念館に集まり、1937 年に南京の難民を救助したロバート・ウィルソン医師の日記と、南京安全区国際委員会委員長のジョン・ラーベさんの日記を見学者の前で読み上げ、そして彼らが平和へのメッセージを書き残した。

スペイン出身の国際ボランティア・フェルナンドさんはウィルソン医師の日記の一節を朗読した。彼は「生命と尊厳を守る唯一の道は、歴史を学び、その教訓を尊重して戦争の繰り返しを防ぐことだ」と感想を記した。

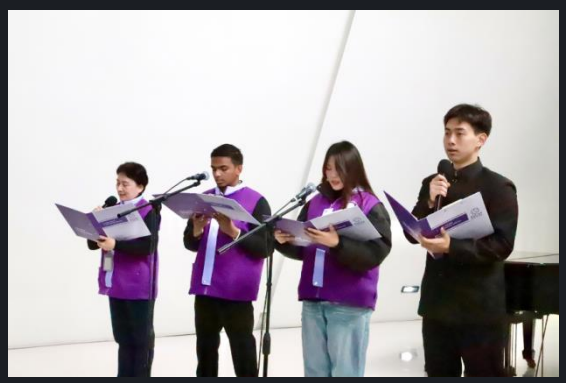
フェルナンドさん（左）

『ラーベの日記』の抜粋を読んだのは、タイ出身の 19 歳の国際ボランティア・劉宝玉さんである。劉さんは中国に来る前から南京大虐殺のことを知っていた。彼女は「国際ボランティアとしての私の朗読を通じて世界の人々が平

和の尊さを知り、戦争の残酷さを直視するきっかけを作りたい、私の行動によって異文化の間に架け橋を築くことができれば」と語った。

劉宝玉さん

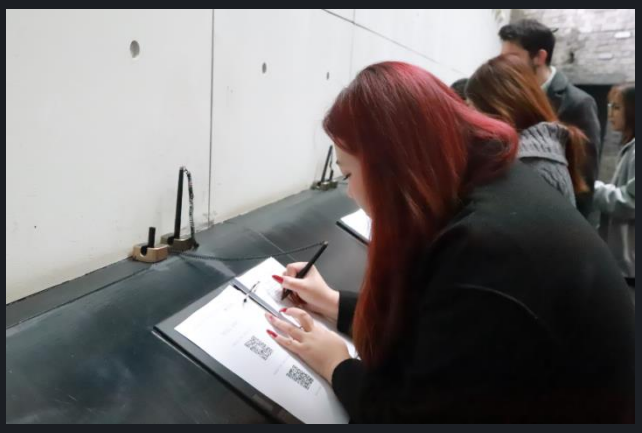
　バングラデシュ出身の国際ボランティア・趙曼衎さんは、詩「紫金草」を朗読した。趙さんは「第二次世界大戦中、戦争の炎はかつて私の故郷も戦禍に巻き込まれた。だからこそ中国人民の苦しみを深く共感できる」と述べた。



趙曼衎さん（左から 2 人目）

　マレーシア出身の 22 歳の国際ボランティア・方依静さ

んは、幼少期より両親から南京大虐殺の史実を伝えられて育った。方さんは「歴史の真実をこの目で確かめるため、ずっと南京に来たいと思い続けていた。この思いが私をここに導き、朗読を通じて歴史への敬意を表し、犠牲者への追悼を表したい」と語った。



方依静さん